

京都への長い道

ジェイムズ・R・アンダーソン

生まれ故郷のスコットランドで心理学の学位を目指して勉強しているうちに、私は次第にヒト以外の霊長類——原猿やサルや類人——の学習と行動の研究に心を惹かれるようになった。野生の霊長類の生態や社会行動、飼育下の霊長類のコミュニケーションや認知能力、いずれの研究も私の想像力をかき立てた。ほどなく私は、この「霊長類学」という領域に対して京都大学の日本人研究者たちが果たしてきた貢献の重要さに気がついた。日本の研究者の名前や、彼らがニホンザルやインドのラングールやアフリカのチンパンジーでおこなった研究を次々に知り、嵐山、幸島、犬山（京都大学霊長類研究所の所在地）といった聞き慣れない地名にもなじみを持つようになった。図書館にこもって、あらゆる種類の霊長類の行動に関する情報を集めているうちに、日本モンキーセンターの出版するプリマーテス (*Primates*) という学術誌の初期の巻号が、私にとって重要な情報源になった。それから 40 年が経って、私が京都大学の霊長類研究者の一員になろうとは、ほとんど想像もしていなかった。

スターリング大学で学士課程と博士課程を終えた後、1983 年に最初の職を得て、私はスコットランドからフランスの東部、アルザス地方にあるストラスブールに引っ越すことになった。ストラスブールは美しい町で、ヨーロッパの歴史の舞台でもあり、ドイツ風の建物と土地柄の建物が混ざり合って、目を見張るような風景の都市である。霊長類研究という道を選んだがためにここに住めるようになったことを果報に感じ、その文化や環境を楽しんだ。ストラスブールにいる間、私は霊長類のさまざまな行動特徴、コミュニケーション、社会的順位階層、学習と認知、そして環境エンリッチメントなどに関する研究をすることができた。

ストラスブールに来て 12 年が経とうとしていた 1994 年の夏のこと、私は初めて日本人研究者と直接接触することになった。霊長類研究センターのプロジェクトのためにやってきた板倉昭二博士である。この共同研究はとてもうまくいき、よく引用される共著論文を出すことができた。2 年後、お返しにショージ（板倉博士）は私を東京でおこなわれた学会に招待してくれた。私を京都へと導く一連の出来事が始まったのはこの時である。学会で私はもう 1 人の日本人研究者、藤田和生博士に出会い、とりとめのない話をした。彼はすでに京都大学の教授で、その研究はよく知っていたし素晴らしいと思っていた。彼はちょっと前に鳥類、齧歯類、非ヒト霊長類の心理学的研究のラボを立ち上げたばかりだった。短い話のあと、彼は京都大学に客員教授として来ないかと申し出てくれた。好奇心もあったし、礼を失したくない気持ちもあって、私は受諾した。実際、それ以上のことはあまり考えなかったし、東京の風景や賑やかな雰囲気の詳細は、1995 年に戻っていたスターリングで授業や研究をしているうちに、どんどん薄れていった。

静かな日々が 1 年ほど続いたあと、事態は突然急速に進み出した。京都からの正式な招待状が届き、大慌てでサバティカルの準備やエディンバラの日本大使館からのビザの取得をしなければならなくなった。そして 1998 年の 7 月のこと、私は初めて京都にやってきた。何が起こることになるのかもよく

分かっていなかった。簡単に京都の歴史を読んで、寺院や庭園のことを勉強したが、もとより京都のような特別なまちについて、初めて訪れる人間が十分に準備できるはずもなかった。

最初に私を驚かせたのは、夏の蒸し暑さだった。スコットランドでは気温はそれほど上がらない。ストラズブールは蒸し暑くなることもあったが、京都は桁違いだ！　そういえばカズ（藤田博士）は、ある電子メールの最後に、夏の気温は 35 度くらいと書いていた。でも彼はこの湿度については何もいってくれなかった！　7 月 8 月のほとんど暴虐的なほどのこの蒸し暑さには慣れるしかなかったが、今となってはこの季候を楽しめるようになった。友人の日本人たちはそれを聞いてしばしば驚くのだが。

京都の 6 ヶ月間、有名な神社や寺院をあちこち訪ね歩いた。あまり知られていない社寺も、素晴らしく雰囲気のある庭園などもたくさん見た。京都内外の散策を紹介した本を 1 冊買った。遠いある日私の住み処になることになる京都の地理が、頭の中ですこしずつ整理されてきた。議論やサルの実験を終えたあと、夜遅くに食料を手に入れるのに大切なコンビニエンスストアなどの場所はすぐおぼえられた。研究は、リスザルのセルフコントロールと戦術的欺きに焦点を当てた。同時に動物行動の入門的な講義を学部生と院生の混在するクラスで教えた。

夏が過ぎ、秋が幕を開けると、涼しい気温と山裾や寺院の変わりゆく木々の彩りに心を奪われた。私たちの研究は興味深い結果を生み出しつつあった。日本語のいくつかのフレーズや、少しばかりの漢字もわかるようになってきた。冬の訪れとともに、スコットランドに帰る時がやってきた。楽しく生産的な 6 ヶ月が終わるのは淋しかったが、なぜか私はいつか京都に戻ってくると感じていた。

最初の半年の滞在の成果はすぐに論文に仕上がった。そして翌年私は京都大学のフェローシップで、サルの心理学的研究を続けることになった。それからというもの、今に至るまで毎年 2 度の訪問をほとんど途切れることなく続けている。私の大学のセメスタシステムでは、毎夏 3 ヶ月京都に来ることができ、冬にも 2 ヶ月滞在することができる。このパターンが、15 年間続いている。この間、藤田教授や彼の学生と共同で、いろいろな研究をすることができた。セルフコントロールや自己認識、非言語的なコミュニケーション、形や色が行動に及ぼす影響など、広範なテーマの論文を出すことができた。ラボは数種の鳥類や哺乳類を対象にさまざまなテーマの研究をする学生たちの活気であふれている。

最初の何回かの滞在では、北白川近辺のあちこちのアパートを借りて住み処にした。吉田キャンパスに来るにはすこぶる便利である。そのあとは出町柳にすることが多くなった。ここも便利だし、おまけに鴨川に近いというありがたいさもあった。鴨川は京都の中でもとりわけ私のお気に入りの場所である。堤を歩いていて退屈することがない。季節を問わず、何か面白いものがある。特にトンビが、流れの中からも川のほとりからも空からも、食べ物をかささらおうと狙っているのは見物だ。桜の季節については知っていたが、堤に沿って咲く満開のそれを実際この目で見た時、それは想像していたよりもはるかに美しい光景だった。すぐに新しいカメラを買って、友人や家族に何枚も写真を送った。異口同音に素晴らしいと言ってくれた。川に近いこと、

買い物に便利なこと、大学に歩いて行ける距離であることから、最終的に身を落ち着かせる場所も出町柳エリアに決めることになった。

2013年夏の滞在の時、カズが京都大学で教える気はあるかと尋ねてきた。また6ヶ月間客員教授に呼んでくれるんだなと思って、もちろんだよ、と返事をした。もう一度サバティカル申請をしないといけないな、と思った。でもそういう意味ではなかった。彼は京都大学の高等教育院について説明し、英語で学生に授業をすることになると話してくれた。これは面白そうだぞ！と思った。教える内容が心理学の入門レベルの講義なら、今自分のやっている講義を拡張して、より広い範囲の学生に理解できるようにすればできるはずだと思った。また英語が母国語でない学生が、特に科学的な内容について、英語で理解し表現することがもっとうまくできるように力を貸すのは、自分にとって大きな喜びだと思った。そんなポジションに応募することを勧めてもらえたことをうれしく思った。それで、自分のキャリアの終盤に来て日本に移住することの利点と難点を天秤にかけ始めた。

だらだらと最終決断を先送りすることもできたかもしれないが、2014年の4月に全てを間に合わせるための応募の締め切りもあって、決断は急がなければならなかった。次のステップは、友人や家族や同僚の意見を集めることである。次々電話をかけまくり、電子メールを書きまくった。びっくりすることに、彼らの意見はほとんど一様にポジティブだった。おかげで、京都大学からのこの招待に「イエス」という重大な決断を下すことができたのである。

いつものように京都に戻ってきたこの冬には、研究の傍ら京都の新生活への準備をし始めた。研究室のみんなは、たくさんのアパートの見学をアレンジしてくれた。ひとつひとつ丁寧に、場所、広さ、快適さ、家賃などを調べたが、結局全部断ることになった。ありがたいことに、みんな私の気むずかしさにとても寛容だった。長いやり取りの末に、ようやく自分にとって「ぴったりだ」と思えるアパートを見つけることができた。そういえるのをうれしく思っている。

こうして、私の「実家」であるスターリング大学での19年間の教員生活を離れ、4月1日から京都での「新生活」が始まった。どんな新しい仕事でも同じだが、それになじむための期間が必要である。私の場合には、それは大学の事務手続きをよく知ること（みんなとてもよく面倒を見てくれた）、新しい授業の準備をすること（この数年間あまりやらなかった仕事だ）、そして授業と研究の両立を可能にする日々の過ごし方を構築することだった。自分の日本語能力を高めることの他に、まだまだいろいろなチャレンジが待っているだろうが、私はいまそれらがやってくるのを楽しみにしている。

フランスのもっとも名高い大学の1つで過ごした初期の12年間のキャリアと、日本のもっとも高名な大学の1つの仲間との共同研究の成功を踏まえて京都に移り住んだことは、いま私にはむしろ「自然な」ことのように思っている。この地で過ごすこの先の何年かの間、学生の知的発展に貢献するとともに、活発な研究を継続できることを願っている。

(訳文：藤田和生)